

## Oracle Database Applianceの採用で 業務効率化に寄与するパフォーマンスと 金融業に求められる高信頼性を獲得



保険業  
従業員：112名（2022年3月31日現在）  
URL：<https://www.sbilife.co.jp/>



SBIインシュアランスグループの一角を担う、SBI生命保険株式会社（以下、「SBI生命」）。個人向け生命保険と団体信用生命保険において、時代の要請に対応する商品開発を推進し、競争力のある商品の提供を行っています。多くの契約者を抱える同社にとって、ビジネスを停止させない安定したデータベース基盤の構築は至上命題です。そうした課題の解決に向け、2017年より活用され続けているのが、Oracle Database Appliance。高い信頼性と運用の容易性、そして優れた処理能力はSBI生命に様々なメリットをもたらしています。

### 個人向け生命保険と団体信用生命保険の 2本柱で成長を継続

SBI生命は、国内インターネット金融のパイオニアであるSBIグループの一員であり、総合的な保険事業を展開しているSBIインシュアランスグループの中核子会社の一つです。個人向け生命保険、団体信用生命保険（以下、団信）の2本柱を主軸として事業を展開。個人向け生命保険では、契約者自身で保険期間が選べるインターネット申込専用定期保険「クリック定期！Neo」が好評を博しています。

また、団信でも、高血圧症や脂血症、肝機能障害等の持病により、一般団信に加入できない人向けに引受条件を緩和した「ワイド団信」など、多様化するニーズに合わせた各種特約等を開発し、競争力のある商品を提供。情報システム部 技術担当部長の狩野泰隆氏は「近年では当社の商品力が評価され、全国の地方銀行や信用金庫、信用組合など、提携金融機関が拡大しており、今後も継続的な成長が期待されています」と話します。

SBI生命は、デジタル変革（DX）についても積極的に取り組んでいます。社内のレガシーシステムの刷新をはじめ、次世代データウェアハウス（DWH）基盤の構築、AI等を活用した経営分析機能の導入など、デジタル技術を活用した業務効率化や顧客満足度向上にも注力しています。

### 止まらないサービスの実現に向け、 Oracle Database Applianceの導入を決定

DXによる攻めのIT活用を推進する一方、SBI生命は金融機関にとって必須となる、ITインフラの安定維持にも継続的に取り組んできました。中でも契約者情報をはじめ、様々な情

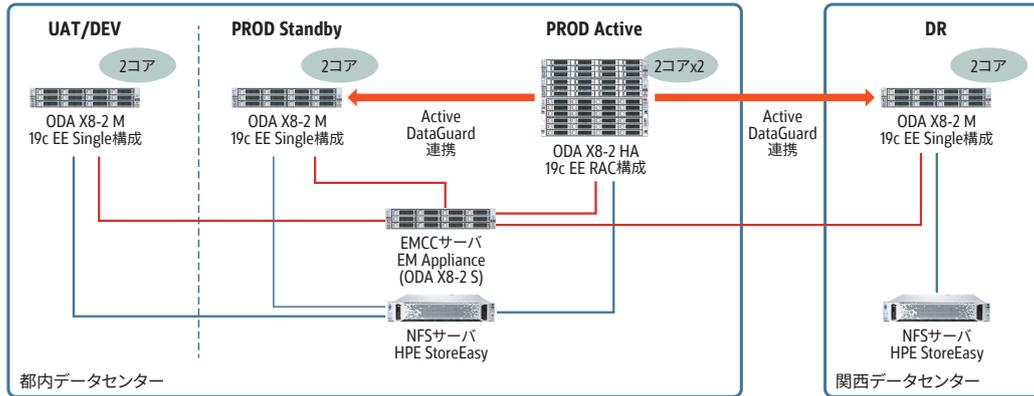
報を管理するデータベース基盤は多くの業務で活用されており、停止することは許されません。

そうしたデータベース基盤の安定運用を支え続けているのが、Oracle Database Applianceです。同社が初めてOracle Database Applianceを導入したのは、2017年に遡ります。背景には、Oracle Database 12cへのバージョンアップを契機とした、データベース基盤のさらなる信頼性向上があったといいます。情報システム部 セキュリティ・インフラ課長の小林直貴氏は、「以前のデータベース基盤はOracle Databaseと物理サーバー、ストレージを組み合わせた構成で、アクティブスタンバイの冗長化構成により耐障害性を確保していました」と説明します。しかし、万が一、データベース基盤が障害等で停止しても、可能な限り迅速に復旧し、業務を継続可能な仕組みが求められていたといいます。

「当時は、社内に障害発生時の移行ノウハウが十分に蓄積されていませんでした。また、スタンバイ機の性能がアクティブ機よりも低く、切り替えがうまくいったとしても引き続き業務を安定して遂行できるのかといった、様々な懸念事項を抱えていました」（小林氏）

この課題を解決したのが、オラクルから提案されたOracle Database Applianceです。情報システム部 セキュリティ・インフラ課主任の北田正史氏は、「ハード／ソフトウェアともにOracle Databaseに最適化されたアプライアンス製品のOracle Database Applianceなら障害ポイントも減らせるうえ、運用負荷も抑制できます。加えて、OSのバージョンアップ等も一括でサポートしてもらえるなど、インフラ保守の面でも大きなメリットがあると考えました」と採用理由を説明します。

SBI生命は、Oracle Database Appliance X6-2-HA/ X6-2Lの導入を決定。以後、現在に至るまで安定稼働を続けてきました。



SBI生命保険株式会社のデータベース・システム概要図

## これまでの安定稼働を評価し Oracle Database Appliance X8-2を採用

そして2021年の定期リプレースを迎える中で、新データベース基盤として採用されたのが後継機種種のOracle Database Appliance X8-2-HA/X8-2Mです。引き続き、Oracle Database Applianceが選ばれた理由はどこにあったのでしょうか。

「1つは、Oracle Database Applianceが特に大きな障害が発生することもなく、安定稼働を維持してくれていたことです。もう1つは、構成変更に伴うリスクの回避です。例えば、以前のような物理サーバーとストレージの3ティア構成に変更した場合、導入にはそれなりに負担がかかりますし、運用が安定するまでに時間も要します。これらの理由から、今回もOracle Database Applianceの採用を決定しました」（小林氏）

また、北田氏も「社内システムのクラウド化が徐々に進む中、データベース基盤のクラウド移行も視野に入れています。Oracle Cloudをはじめパブリッククラウドとの親和性の高さも選定理由の1つとなりました」と加えます。

2021年度に入った直後から、Oracle Database Appliance X8-2-HA/X8-2Mを活用した新データベース基盤への更改プロジェクトがスタート。2021年秋前のシステム導入後、セキュリティ・インフラ課と開発課の両方によるテストを経て、第1フェーズとなる団信システムの移行が2022年1月に完了し、第2フェーズの個人生命保険システムの移行も2022年6月に完了しました。後継機種種の導入ということもあって事前のPoC等を実施しませんでした。要件定義・設計の段階からセキュリティ・インフラ課と開発課が共同でプロジェクトを推進したことも奏功し、特にトラブルもなく導入を完了できたといいます。

## サービス強化に向けたビッグデータ分析でも Oracle Database Applianceの活躍に期待

最新のSSDを搭載したOracle Database Appliance X8-2シリーズにリプレースするとともに、Oracle Databaseも12cから19cへとバージョンアップしたことで期待される効果が、処理能力の大幅な向上です。狩野氏は、「開発課の目線からは、様々な業務における、さらなるレスポンス向上に期待しています。前回のOracle Database Appliance導入時にも処理能力は飛躍的にアップしましたが、最新機種種の導入とOracle Databaseのバージョンアップにより、さらなるスピードアップが実現されると考えています」と話します。

インフラ担当の北田氏も「大きな導入効果としては、バックアップの所要時間が大幅に短縮されていることが挙げられます。Oracle Database Appliance X8-2の導入と併せて差分バックアップに変更したことで、これまで何時間もかかっていた処理が数十分程度にまで短縮できました。今後、保険契約数の増加に伴うデータ増で、バッチ処理時間の増加が懸念されましたが、そうした不安も払拭されました」と評価します。

Oracle Database Appliance X8-2シリーズの導入により、金融業のIT基盤に不可欠となる信頼性に加え、将来のビジネス成長にも対応する処理性能を獲得したSBI生命。狩野氏は「今後は行政データをはじめとした外部のデータも活用したビッグデータ分析を推進し、より顧客満足度を高められるような商品の開発やサービス強化に努めていきたいと思えます。そのための基盤として、Oracle Database Applianceの活用もさらに進めていきたいと考えています」と今後の展望を語りました。